



動物レスキュー通信

2015年8月 第27号 (平成27年8月1日発行)

発行元 一般財団法人 国連世界動物救済支援機構 詩月財団

詩月(しづく) : 詩月財団 理事長
愛玩動物飼養管理士 一級
お問い合わせ : sizuku.foundation@gmail.com

犬猫の高齢化 最期の時を考える



現在の日本は、高齢化社会を通り越し、超高齢化社会に突入してしまいました。そして犬や猫などのコンパニオンアニマルにも同じく高齢化社会に突入しています。1980年には犬の平均寿命は3.7歳、猫は3歳でした。しかし昨年2014年には犬は14.8歳、猫は15.1歳となり、この35年で犬と猫の平均寿命が飛躍的に延びたことがわかります。犬や猫の平均寿命が伸びた理由として、1、ワクチンや駆虫薬の普及(死亡原因の上位だった感染症が予防でき死亡数が減少した)、2、獣医療の進歩と改善(検査の技術や治療方法の向上により病気の早期発見や治療が可能になった)、3、不妊手術の普及(生殖器の使用や支給等の病気の減少につながった)、4、ペットフードの栄養状態の向上、5、しつけの向上と室内飼育の普及(交通事故などで亡くなる犬猫が減った)、6、飼い主の意識の向上(シブバニオンアニマルとして家族の一員という意識が高まり飼育管理がしつかり行われるようになってきた)などが挙げられます。しかし、これらに伴い犬猫の病気も増え、介護を必要とする犬猫も増えてきている現状です。今では犬猫の介護がトレンドのように受け取られている悲しい風潮があるのも事実です。しかし、介護をするのではなく、いかに介護を予防するかを考え、実行してほしいのです。そうすることによって、犬や猫が最後の瞬間を迎える時まで「犬らしく」「猫らしく」生きていく事ができるのです。人間でも同じこと

が言えますが、単に寿命を延ばすのではなく、健康寿命を伸ばし、実際に亡くなる瞬間と元気で健康な時との差を出来る限り短くすることが目標です。犬や猫が寝たきりになると言う事は本来動物としてはとても自然なことです。飼い主さんとしては、病気や怪我など、愛犬、愛猫がどんな状況に陥ってしまったとしても、一日でも一分でも長く、愛するワンちゃんやネコちゃんと一緒にいたいという思いがあるはずですが、その飼い主さんの思いを実現するために愛犬、愛猫の苦痛を長引かせることになっているとすれば、それはとても悲しいことで、考えただけでも胸が痛む事だと思えます。でも実際に起こりうることなのです。

スウェーデン人の考え方

スウェーデンでは愛犬や愛猫の最後の決断をすることは、終生飼育をする飼い主の責任とされています。スウェーデンケンネルクラブの「飼い主の手引き」には次のようなことが書かれています。「最後の瞬間というのは、犬を飼っている人は訪れるものです。そしてその決断を下すのは非常に難しいものです。しかし、犬が辛い痛みを抱えていたり、重い病気にかかっている場合は、考慮すべき事でもあります。最も一般的

な方法は、獣医師の下で安楽死を行うことです。飼い主としては、決めるべき時が何時なのかまだ、それが正しい決断なのかはわからないことでもあります。まずは獣医師に診断をしてもらいましょう。これらの事からわかるように、安楽死を前提とした上で、高齢犬の最期を考える、と言う姿勢が見えます。犬猫の安楽死(ここで言う安楽死とは飼い主の腕の中で安心した状態で獣医師の手によって行われるものであり、犬猫の殺処分とは全く異なるものです)については賛否両論いろいろあると思いますが、犬も猫も人間と同じ命。尊いものと言ったことに何ら変わりはありません。しかし人間が犬猫に苦痛をずっと与え続けているのかという事になると疑問が生まれ、改めて考え直さなくてはならないかもしれません。私自身、愛猫を頸の扁平上皮癌で亡くしました。ガンを宣告された際に獣医師からは安楽死も視野に入れるように助言されました。私はその時、敢々悩みました。しかし、顎がなくなり、出っぱなしになっている舌で、一生懸命にお水を飲み、生きようと頑張っている愛猫を目の当たりにし、安楽死と言う選択は私の頭の中からは消えてしまいました。愛猫が亡くなった今、あの時、安楽死を選ばせず、つらい思いをさせて頑張っていたのかは、全く判断ができません。愛猫にしてみれば「あなたの工」だったわ」と言われてしまうかもしれません。このように、愛犬、愛猫の病気や怪我における安楽死の問題は、これから先も一生懸命の出ない問題なのかもしれません。しかし、犬猫の終生飼育をする飼い主の義務として、責任として、必ず考えておかななくてはならない問題です。あなたはどの決断しますか？

(詩月)